

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和４年度～令和６年度)

機 関 名： 箕面市教育委員会

Ⅰ．事業実施の目的

<事業実施の目的>

本市における保育・幼児教育施設と小学校の接続に関しては、国と同様に行事の交流程度にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成、実施が行われていない等の課題があり、保育・幼児教育施設と小学校の円滑な接続を推進するためには、交流活動を中心とした連携と同時に、相互理解を深め、互いの教育課程をつなげる接続が必要であると考えた。そこで、就学前5歳児から小学校1年生までの期間を「架け橋期」と捉え、市内全ての子どもが小学校へ円滑に移行できるように、国の「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き・参考資料」を活用し、共通の視点をもとに架け橋期カリキュラムを策定することをめざした。

また、事業終了後は各校区に交流・接続等の進捗状況を聞き取りながら、必要に応じて保育・幼児教育施設と小学校とのコーディネートを行っていく。また、引き続きすべての保育・幼児教育施設と小学校の職員が架け橋期の教育の意義について理解を深め、語り合う場をもてるよう幼保小合同研修会をはじめとした研修会等を実施し、市内全域への普及をめざしていく。また、保護者向けおたよりの発行し、保護者の理解も深まるよう働きかけていく。

<園・小学校の施設数等>

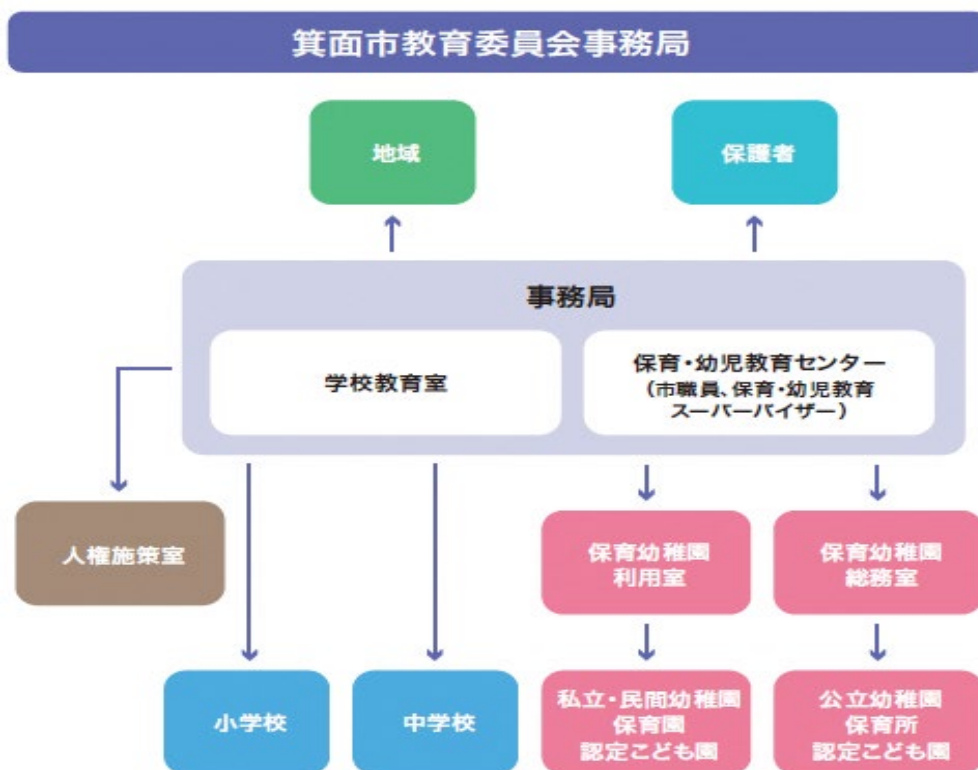
(令和7年1月現在)

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	2	5	2	26	1	3	0	14	1
園児・ 児童数	0	50	847	246	2,244	180	496	0	8,550	347

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

<組織図・体制図>



【保育・幼児教育センター】

- ・ 架け橋期カリキュラム開発検討会議等の運営
- ・ 保幼こ小接続（架け橋期）研修会をはじめとした研修企画・実施
- ・ 小学校への周知・訪問依頼
- ・ 保護者へのおたより作成

【学校教育室】

- ・ 架け橋期カリキュラム開発検討会議等への出席
- ・ カリキュラム作成にあたっての学校教育に関する助言
- ・ 小学校への周知

【教育センター】

- ・ 保育・幼児教育センターと連携して架け橋期に関する研修会の企画・実施

【人権施策室】

- ・ カリキュラム作成にあたっての人権教育に関する助言

【保育幼稚園総務室】

- ・ 公立園所へ架け橋プログラムに関する情報の提供

【保育幼稚園利用室】

- ・ 民間園へ架け橋プログラムに関する情報の提供

■体制図（架け橋期カリキュラム開発検討会議（以下、開発検討会議という。））

役割	所属等	会議の様子
会長	子ども未来創造局 担当部長 （箕面市教育委員会）	
委員※	箕面市立萱野小学校 校長	
委員※	箕面市立かやのこども園 園長	
委員※	箕面保育園 園長	
委員※	こども園アサンプション国際幼稚園 理事	
委員	架け橋期保護者 3名	
架け橋コーディネーター	大阪総合保育大学 教授 （包括連携協定大学）	

※委員の所属する施設からワーキンググループのメンバーを選出

（開発検討会議）

市教育委員会子育て担当部長、公立小学校校長、公立・民間園長、保護者といった架け橋期の関係者と架け橋コーディネーターとなる学識経験者で構成。それぞれの立場から架け橋期カリキュラムの共通の視点や内容等について意見交換する会議体を設置。

■体制図（ワーキンググループ）

役割	所属等	ワーキンググループの様子
架け橋コーディネーター	大阪総合保育大学 教授 （包括連携協定大学）	
メンバー（4名）	箕面市立萱野小学校 1年生担任（3名） 人権担当（1名）	
メンバー（2名）	箕面市立かやのこども園 主任 5歳児担任	
メンバー	箕面保育園 主任	
メンバー	こども園アサンプション国際幼稚園 4歳児担任	

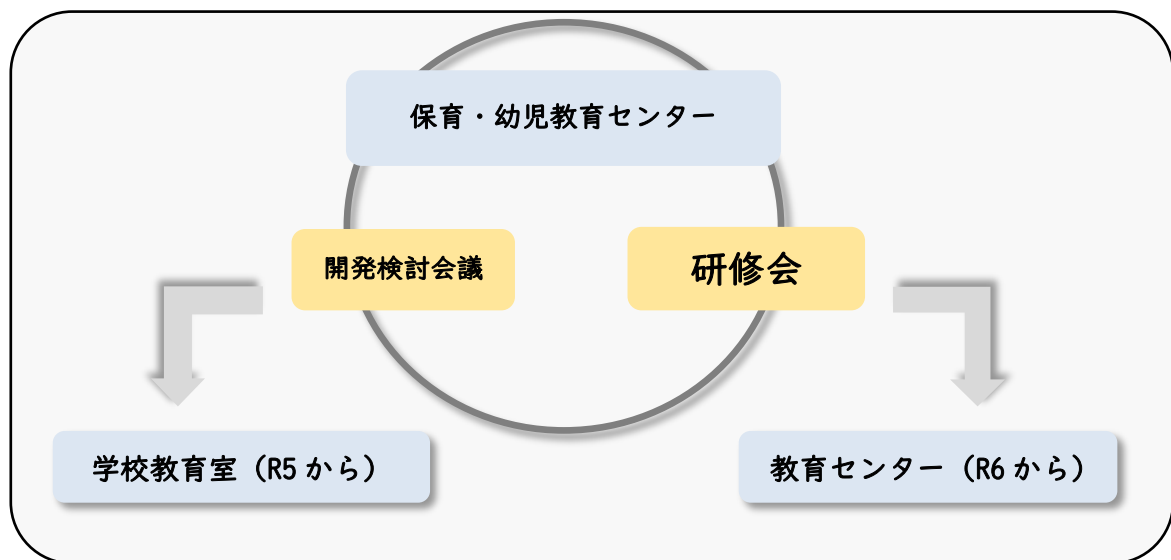
（ワーキンググループ）

開発検討会議に参加する施設の職員（5歳児担任や1年生担任がメイン）で構成。施設見学やドキュメンテーションを通し、幼児教育と小学校教育について相互理解を図り、架け橋期カリキュラムの開発・実践・検証を行う。

<体制づくりの進め方>

【体制づくりの進め方】

本事業がスタートした令和4年度は、市内の保育・幼児教育施設の保育・幼児教育の質向上を担う「保育・幼児教育センター」が主担当となり、開発検討会議の運営や幼小接続に関する研修会の開催等を実施し、土台づくりを進めた。事業を進めるにあたり、学校教育に関する知見や経験を持つ人材が必要不可欠と認識していたため、令和5年度からは学校教育を所管する「学校教育室」を新たに事務局に参集し、幼児教育と学校教育を所管する2つの部署が開発検討会議の事務局を担った。また、令和6年度からは学校教育を含む教育に関する研修等を所管する「教育センター」と連携し、架け橋プログラムにおける先進自治体の職員を招き、小・中学校教職員向けにも研修会を実施し、架け橋期における教育の意義について理解を深めた。



2-2. 協力園・協力校

<協力園・協力校の概要>

(令和4年度)				
設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園校のグループ
公立	小学校	萱野小学校	1年=94人、2年=99人、3年=129人、4年=103人、5年=114人、6年=98人	A
公立	保育所	萱野保育所	0歳児=4人、1歳児=16人、2歳児=18人、3歳児=24人、4歳児=20人、5歳児=25人	A
公立	幼稚園	かやの幼稚園	4歳=9人、5歳=22人	A
(令和5年度)				
公立	小学校	萱野小学校	1年=97人、2年=89人、3年=95人、4年=127人、5年=102人、6年=111人	A
公立	保育所	萱野保育所	0歳児=4人、1歳児=16人、2歳児=18人、3歳児=24人、4歳児=20人、5歳児=25人	A
公立	幼稚園	かやの幼稚園	4歳=9人、5歳=22人	A
(令和6年度) 1月時点				
公立	小学校	萱野小学校	1年=89人、2年=94人、3年=89人、4年=96人、5年=124人、6年=103人	A
公立	幼保連携型 認定こども園	かやのこども園	0歳児=6人、1歳児=17人、2歳児=18人、3歳児=25人、4歳児=54人、5歳児=56人	A

<協力園・協力校の指定プロセス>

【プロセス】

本事業の実施にあたり、箕面市立かやの幼稚園と箕面市立萱野小学校が同じ敷地内に併設され、本事業の実践・検証を行う環境にふさわしいことや、令和6年度に箕面市立かやの幼稚園が近隣の箕面市立萱野保育所と箕面市立なか幼稚園と箕面市初の幼保連携型認定こども園として再編統合されることから、多様な子どもの状況に合わせたプログラムの開発ができることを期待し、当該地域をモデル地域に設定した。

A map showing the building's location in a residential area. The building is marked with a red pin and is enclosed in a red rectangle. Surrounding landmarks include '箕面市立 かのやの幼稚園' (Mino City Kanoya Kindergarten) to the north, 'JA大坂北部農産物直売所' (JA Osaka Hokubu Nishiki Market) to the northeast, 'indoor cafe' to the east, 'Audi 箕面' (Audi Mino) to the southeast, and 'マイスターモータース 第2ショールーム' (Master Motors 2nd Showroom) to the south. A red rectangle highlights the building and its immediate surroundings.

2－3．協力団体等

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
私立幼稚園連盟	架け橋期カリキュラム開発検討会議の委員の推薦
民間保育連盟	架け橋期カリキュラム開発検討会議の委員の推薦
大阪総合保育大学 (包括連携協定大学)	架け橋コーディネーターの派遣及び保幼小接続に関する研修会への講師派遣
大阪青山大学 (包括連携協定大学)	本市と連携して幼保小の架け橋プログラムに関する講義を学生向けに実施

<各協力団体等との連携>

民間保育・幼児教育施設連絡会で取組について進捗を報告した。

２－４．架け橋期のコーディネーター等

<架け橋期のコーディネーター等の概要>

新規／継続	事業に関わった 年度	役職名	経歴
新規	令和４年度 ～令和６年度	架け橋期コーディネーター	大阪総合保育大学 児童保育学部 教授

<架け橋期のコーディネーター等の役割等>

【決定したプロセス】

架け橋コーディネーターは、本市と包括連携協定を締結する大学に所属しており、幼保小接続に関する見識があること、また、本市の園内研修等の講師としての実績が長年あり、取組以前から本市の園内研修講師等の実績があることから、本市の実情を踏まえたうえで、幼保小の架け橋プログラム調査研究事業を進めることができると考えたため、上記教授にお願いすることとなった。

【担当業務】

- ・ 開発検討会議・ワーキンググループ等への出席
- ・ 保幼こ小接続（架け橋期）研修会の講師として講演（幼小合同研修会等）
- ・ 国・先進自治体等について情報提供
- ・ 架け橋期カリキュラム作成等への指導・助言

【成果】

- ・ 開発検討会議やワーキンググループの活動等を通じて、カリキュラム作成等に必要な視点や項目等についての的確な指導助言を受けることができた。
- ・ 国や先進自治体の動向等の情報提供があり、架け橋プログラムを進めるにあたって参考にしながら進めることができた。

【課題】

- ・ 架け橋コーディネーターから架け橋期における接続の意義や事業の目的等を研修等を通じて発信するが、施設によって取組の意義や必要性の理解に差が生じた。
そのため、各施設種別ごとの目線で話せる講師の選択に苦慮した。先進自治体の職員（教頭や指導主事）を講師として迎える等、架け橋期に関わる全ての職員に意図等が伝わるように工夫した。

3. 架け橋期のカリキュラム開発会議

3-1. 会議委員等

<会議委員一覧>

会議の代表者氏名		今中 美穂	他8名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
今中 美穂	箕面市教育委員会 子ども未来創造局 担当部長（子育て）	会議会長	令和5年4月3日 ～令和7年3月31日
浅井 文彦	箕面市教育委員会 子ども未来創造局 担当部長（子育て）	会議会長	令和4年7月11日 ～令和5年3月31日
佐藤 秀昭	箕面市立萱野小学校 校長	小学校代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
廣田 尚美	箕面市立かやのこども園 園長（令和6年度に設置）かやの幼稚園 園長 ※①	公立園所長会代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
中森 朋子	箕面市立 萱野保育所 所長 ※①	公立園所長会代表	令和4年7月11日 ～令和6年3月31日
高岡 なつ子	箕面市立 なか幼稚園 園長 ※①	公立園所長会代表	令和4年7月11日 ～令和6年3月31日
辻 陽子	民間保育園 園長	民間保育園代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
丹澤 直己	私立認定こども園 常任理事	私立認定こども園代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
瀧川 光治	大阪総合保育大学 教授	架け橋コーディネーター	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
保護者 A	教育・保育施設利用 児童保護者	保護者代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
保護者 B	教育・保育施設利用 児童保護者	保護者代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日
保護者 C	教育・保育施設利用 児童保護者	保護者代表	令和4年7月11日 ～令和7年3月31日

※①萱野保育所、かやの幼稚園、なか幼稚園を令和6年度にかやのこども園として再編統合。

<会議委員の決定プロセス>

本事業を進めるにあたり、新たに架け橋期カリキュラム開発検討会議を新設した。施設種別や地域を巻き込み、子どもを取り巻く様々な立場のかたの意見を聴取したいことから、設定し

たモデル地域（萱野小学校区）に関わりがある関係各所に推薦を募り、民間保育園・認定こども園園長は民間保育連盟及び私立幼稚園連盟から、保護者は、PTA や保護者会から推薦された。

モデル地域の公立幼稚園・保育所・小学校の管理職、推薦のあった民間保育園や認定こども園の園長や保護者、包括連携協定大学の学識経験者で構成する開発検討会議を新たに設置し、さまざまな立場からご意見等を基に、カリキュラムの完成をめざした。

架け橋期カリキュラム開発検討会議

- ・方針の決定
- ・さまざまな立場のかた(校長、公立・私立・民間園長、保護者、学識経験者)との意見交換



ワーキンググループ

- ・施設種別の垣根を越えた職員同士の関係づくり
- ・それぞれが行っている教育活動の内容について語り合い、相互理解の促進
- ・開発検討会議で決定した方針などを基にカリキュラムの開発
- ・開発したカリキュラムなどの実践・検証



3-2. 開催実績

<開催実績>

令和4年度度 「土台づくり」 まずは語り合い		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
7月22日 17時～19時	・委員自己紹介 ・「架け橋期カリキュラム開発検討会議」の趣旨・目的等について ・講演「箕面市『架け橋期プログラム』作成に向けて」瀧川教授（コーディネーター） ・意見交換等 ・今年度の予定及び瀧川教授からの助言	幼保小の架け橋プログラムを実施する趣旨等を共有することができた。 今後の方向性を確認できた。
9月13日 14時～ 14時45分	・第1回、第2回ワーキンググループ活動報告等 ・瀧川教授からの助言	ワーキンググループの活動を通じて、保育・幼児教育施設と小学校における子どもの姿、工夫、声掛け等を確認できた。
10月27日 17時～18時	・第3回ワーキンググループ活動報告 ・箕面市支援教育充実検討委員会について（人権施策室より） ・瀧川教授からの助言	本市における人権教育の経過や課題、今後の方向性を確認できた。
12月22日 17時～18時	・第4回ワーキンググループ活動報告等 ・萱野小学校生活科授業見学報告等 ・国及び他自治体の取り組みの紹介等について 安達 譲氏（保育・幼児教育スーパーバイザー） ・瀧川教授からの助言	ワーキンググループの活動を通じて、幼児教育と小学校教育における工夫や違い、国等の動向について確認できた。
2月27日 17時～18時	・第5回・第6回ワーキンググループ活動報告 ・今年度の総括 ・次年度にむけて	ワーキンググループの活動を通じて、幼児期の経験を意識した授業づくりや声かけが円滑な接続に繋がることを確認できた。 今年度の成果や各委員が考える感想を会議で共有できた。
令和5年度 「カリキュラム（素案）の作成」 カリキュラム（素案）の作成・実践・検証		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月18日 17時～18時	・令和5年度の年間計画について ・第1回ワーキンググループ活動報告 ・保護者アンケートの実施について	カリキュラム作成に向け、めざす子ども像、共通の視点を共有できた。 カリキュラムの項目等の

		大枠について、会議で確認した。
7月21日 17時～18時	・保護者アンケートについて ・ワーキンググループの活動報告 ・架け橋期カリキュラム（素案）について	ワーキンググループの活動報告から、カリキュラムの作成状況や内容等について確認した。
10月18日 17時～18時	・ワーキンググループの活動報告 ・意見交換等 ・カリキュラム（素案）実証・検証方法について ・保護者アンケートの実施報告	カリキュラム（素案）の不足部分等の追記・変更について確認できた。また、実践・検証方法についても確認した。
2月21日 17時～18時	・ワーキンググループの活動報告 ・事例集について ・カリキュラム実践・検証状況について報告 ・総括及び最終年度に向けて課題共有	事例集の内容について、確認できた。また、令和6年度の方向性やスケジュールについても確認した。

令和6年度 「カリキュラムの完成」 地域の実情に合わせたカリキュラムへ

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
7月17日 17時～18時	・「架け橋期カリキュラム開発検討会議」の趣旨、目的等について（再確認） ・ワーキンググループの活動報告 ・箕面市架け橋期カリキュラム ・他地域への展開について ・保護者向けおたよりの作成・配布について ・瀧川教授からの指導助言	これまでの実践検証の結果を基に、カリキュラムの事項や文言等の訂正について承認を得た。
10月23日 17時～18時	・ワーキンググループの活動報告 ・他地域への展開状況について ・カリキュラムの内容・構成等について ・架け橋期カリキュラム開発検討会議に参加した感想 ・瀧川教授からの指導助言	冊子の構成や事例集を作成する目的等について、委員に確認でき、承認を得た。
2月19日 17時～18時	・3年間の振り返り ・今後の架け橋プログラムの展開 ・今後の取組に期待すること ・瀧川教授からのご助言	今後の展開方法や予定について確認した。

3-3. 成果と課題

<架け橋期のカリキュラムに関する議論>

【議論の内容】

- ①架け橋期カリキュラムに、就学前の子どもが小学校体験のような取組を経験したことで、小学校入学に対して期待感が高まったことなどを記載することで、接続に対して園も取り組みやすくなるのではないかな。
- ②架け橋プログラムの取組を保護者にも共有することで、保護者の安心につながり、さらには子どもの安心にもつながっていき、小学校への円滑な接続につながる。
- ③子ども同士の声かけや先生との関わりが子どもの「安心」につながると思うので、カリキュラムにも記載したほうがいいのではないかな。
- ④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）と教科のつながりがこのカリキュラムではわかりにくい。カリキュラムだけでは具体性に欠ける。
- ⑤箕面市が力を入れ取り組んでいる「人権」を色濃く表した方がいいのではないかな。

【決定した方針】

- ①箕面市の保育の方向性を踏まえて、期待する子ども像について「生きる力・つながる力・主体的に学ぶ」という視点で再度検討し、「進級した喜びを感じる」「新しい出会いを楽しむ」等を盛り込んだ。
- ②さまざまな「つながり」を意識するため、1年生4月の【期待する子ども像】では、「新しい出会いを楽しむ」「友だちの名前を覚える」「親しみの気持ちをもつ」でつながりを表した。
5歳児4月から9月の【先生との関わり】では、「聞いてもらう喜び」「伝える喜び」「それぞれが思いを伝え解決していけるような」や1年生4月【先生の関わり】の「『ほぐす』『ひらく』『つながる』を心がける」「子どもとの信頼関係を築くことを心がける」、1年生10月から3月の【先生の関わり】の「友だちと一緒に考えたり、協力したりできる活動を取り入れる」の事項を取り入れた。
- ③さまざまな支援や配慮を必要とする子どもたちがいるなかで、一人一人を大切にすることをより意識するため、◆で追加し、表している。例えば5歳児4月から9月の子どもの学びや生活を豊かにする園の環境の構成・小学校の環境づくりでは、「一人ひとりの子どもにとって」などを追加した。（のちに「すべての子ども」として集約した。）
- ④就学前施設と小学校の現場でそのつながりを意識できるように、事例集を作成していく。事例集には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）を記載し、教科とのつながりがわかるようにした。
- ⑤5歳児4月から9月の【先生の関わり】に「一人ひとりが大切にされる中で、人に対する信頼感や個性を互いに認めあう気持ちを育む。」や1年生5月から9月では「日々の活動を通して、自分や友だちの良さに気づけるような機会をもち、一人ひとりが自分らしさを発揮しながら、互いに認め合えるようにする。」を追加した。

<会議設置による成果と課題>

【成果】

- ・就学前保育・教育施設、小学校、保護者、学識経験者から意見を聴取することで、社会に開かれたカリキュラムを作成することができた。

- ・会議を通じて、幼児期の活動が教科につながっていることについて委員の理解を深めることができた。
- ・会議に出席し、それぞれが行う活動の工夫を知ることで、保護者から子どもへの声かけについて変化があったと意見が聞けた。
- ・それぞれの教育活動を、架け橋の視点を取り入れて見直すことができた。
- ・設定した議題以外にも、参加園が保護者が見る視点について聞き取るなど、様々な意見交換ができた。

【課題】

- ・新型コロナウイルス感染拡大により、事業当初は zoom を活用したオンライン開催が多かった。オンライン特有の話しづらい環境のもと、会議で活発な議論ができなかった。
- ・施設種別によって、業務におけるピークタイムの違いによる会議時間の調整が必要なこと。
- ・施設によって架け橋期の取組の意義や必要性について、温度差があること。

【課題への対応策】

- ・オンライン会議であっても、会場を用意し、関係者が集まれる環境を設定し、委員が活発に意見交換できるよう事務局が手助けした。
- ・架け橋期における取組の意義や必要性をテーマに研修会を実施し、保幼小に参加を呼びかけた。
- ・地域によって特色やリソースの有無などが異なるため、全市域で同じ進め方をするのはなく、地域の実情を考慮して進めることとした。

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

本市では、開発検討会議委員の所属で、実際に保育・教育に携わるかたで構成される「ワーキンググループ」を設置した。開発検討会議で決定した方針を基に下記フェーズでカリキュラムの開発、そして開発したカリキュラム等の実践・検証を行ってきた。

■ フェーズ①「お互いを知る」

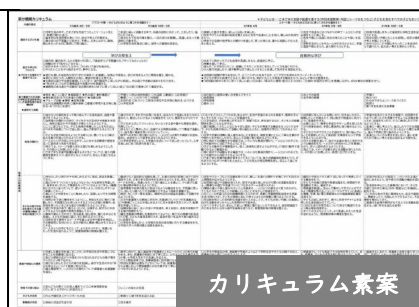
カリキュラムの開発にあたっては、教育内容や指導方法等相互理解を深めるため、施設見学とドキュメンテーションワークを中心に「お互いを知る」ことから始めた。「子どもの姿」を軸に「育みたい資質能力」「幼児期までに育ってほしい姿」「各教科等とのつながり」を共通の視点として語り合い、相互理解を深めた。所属する施設種別によって、業務のピークタイムが異なることが課題であったまた、ただ年間の計画に沿って活動をすすめられるようにした。



ドキュメンテーションの様子

■ フェーズ②「架け橋期カリキュラムの検討」

施設見学やドキュメンテーションワークを引き続き実施するとともに、各教育現場の工夫や活動をまとめた「架け橋期カリキュラム素案」を作成した。特に小学校入学直後の4月には、配慮や工夫が必要な時期であることから、入学当初の学校見学を実施し、カリキュラムにも4月のみ別枠で記載した。また5歳児の子どもの姿と小学校1年生の子どもの姿を理解するうえで「幼児期までに育ってほしい姿」（10の姿）を取り入れ、事例の中に具体的に記載し「見える化」した。



カリキュラム素案

■ フェーズ③「箕面市架け橋期カリキュラムの策定等」

作成した素案を基に、モデル地域において実践し、評価、改善するというサイクルを繰り返した。事例をとおして検証を行う中で不足している事項について追記する、記載の時期を修正する、5歳と1年生の記載に繋がりを確認する、などブラッシュアップし、令和6年7月17日開発検討会議において「架け橋期カリキュラム」の承認を得た。

また、カリキュラムの他に、事業のまとめ、5歳児・1年生の事例集や1年生の学級づくりに役立つヒント集など3年間の調査研究結果を冊子にまとめ、「箕面市架け橋期カリキュラム」を令和7年3月に策定した。策定したカリキュラムは教育委員会事務局、市内保育・幼児教育施設、小学校、関係各所に配布し、ホームページにも掲載する。



・アプローチ期（①５歳児４月～９月、②５歳児１０月～３月）とスタート期（③１年生４月、④１年生５月～９月、⑤１年生１０月～３月）で構成している。③については、特に配慮が必要な時期であると考え、小学校１年生は４月を他の時期とまとめず、単独で作成している。

[illegible]

- ・校区によって、地域リソース（地域のイベントの有無や、就学前保育・教育施設数の多寡や園の規模等）が異なるため、「地域での取組」や「子どもの交流」、「教職員の交流」の部分は、校区ごとの追記としている。校内で新たに取り組む内容がないか等を定期的に検討するため、学校の教育指導計画にも挿入することとし、毎年自らの教育活動を、架け橋の視点を意識して見直せるようにした。

[illegible]

4－3．架け橋期のカリキュラムの実践

【実践結果を踏まえて改善した点】

- ・ 5歳までに経験してきたことを活かした関わりが大切であることから、「教えてあげなければ」という思いから「知っていることを認めること」を意識する記載に変更した。
- ・ 環境を整えるだけではなく配慮が必要であることから、「個人差があることを踏まえ…視覚支援とともに丁寧な心がけや」を追記。様々な園から集まる子どもたちのばらつきに配慮した。
- ・ 5月～6月から子ども同士の関係性の視野が広がることから、4月に入れていた「隣同士や班等少人数で話し合ったり」を5月～9月に移動した。
- ・ 指導上の配慮事項は全ての子どもへの配慮に繋がるため、指導上の配慮事項に「*子どもとは・・・ 様々な支援や配慮を要する（特別支援教育・外国にルーツをもつ等）子どもを含む全ての子どもをいう」と追記した。

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
7月22日 17時～19時	保幼小接続研修会	オンライン	架け橋期カリキュラム開発検討会議関係者 教育委員会の職員	箕面市「架け橋期プログラム」作成に向けて～「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「幼児期の資質・能力」を踏まえたカリキュラムづくりを目指して～
9月27日～ 10月11日	保幼小接続研修会	オンデマンド配信	架け橋期カリキュラム開発検討会議関係者 保育・幼児教育施設職員 教育委員会の職員	就学前の子どもたちの生活や遊びから育つ「学びの芽生え」を小学校での「自覚的な学び」へと接続するための視点について
11月2日 15時～ 16時45分	保幼小接続研修会	オンライン	架け橋期カリキュラム開発検討会議関係者 保育・幼児教育施設職員 教育委員会の職員	就学前の子どもたちの生活や遊びから育つ「学びの芽生え」を小学校での「自覚的な学び」へと接続するための視点について～実践例～
2月27日 14時30分～ 16時15分	保幼小接続研修会	集合開催	保育・幼児教育施設のミドルリーダー	主体的に遊ぶ子どもの姿を通して、「3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を読みとり、子ども理解や学びにつながる環境等についてグループワークを行う
令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月18日	保幼小接続研修会	集合開催	保育・幼児	主体的に遊ぶ子どもの姿を

13時30分 ～ 15時30分			教育施設の ミドルリー ダー	通して、「3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を読みとり、子ども理解や学びにつながる環境等についてグループワークを行う
8月7日 13時30分 ～ 16時	保幼小接続（架け橋）研修会	集合開催	各中学校区における管理職 保育・幼児教育施設の職員	幼保小の接続のポイントや、手がかりとなる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について
11月15日 ～ 12月28日	保幼小接続（架け橋）研修会	オンデマンド配信	保育・幼児教育施設、小学校、箕面市教育委員会事務局等の職員	幼児期の子どもたちが遊びを通じて何を学べるのかについて
2月2日 13時45分 ～ 16時30分	萱野小学校 校内研究会	集合開催	萱野小学校教職員、二 中校区教職員、架け橋 期カリキュラムにお ける関係者	低学年における授業づくりについて

令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4月10日～ 8月30日	保幼小接続（架け橋期）研修会	オンデマンド配信	小学校区の管理職、小学校1年生にかかわりのある先生、保育・幼児教育施設の職員、その他受講を希望するもの	本市のこれまでの取組内容の報告とモデル地域での活動について
7月26日 10時～12時	保幼小接続（架け橋期）研修会	集合開催	小中学校2年目教職員、その他受講を希望する教職員	接続に関して先進的に実施する自治体の取組について
8月5日	保幼小接続（架け橋期）研修会	集合開催	保育・幼児教育施設の職員	箕面市が取り組んできた架

14 時～ 16 時 45 分	橋期）研修会		教育施設に おいて小学 校連携に関 わる職員、 箕面市立小 学校・小中 一貫校の教 員	け橋期カリキュラム作成に あたり、ワーキンググルー プ参加者が感じた取り組み の意義や成果を発表者から 学び、自園・自校での取組 みについて幼保小で考え る。1 年生の教科書をもと に、子どもの学びについて 語り合う。
9 月 17 日～ 11 月 29 日	保幼小接続（架け 橋期）研修会	オンデマ ンド配信	小学校全教職 員	接続に関して先進的に実施 する自治体の取組について

<研修の成果と課題>

【成果】

■保育・幼児教育施設

- ・ 小学校の先生と語り合うことで、幼児教育との違いや共通点を確認できた。
- ・ 自園の保育について、振り返ることができた。
- ・ 就学に向け、自園で実践できることを考えるきっかけとなった。



幼保小合同研修会

■小学校

- ・ 保育・幼児教育施設の先生と話す機会が大変有意義であり、学びがあった等の意見があり、参加者全体の満足度は高かった。
- ・ 入学してくる 1 年生は「ゼロからのスタート」ではなく、幼児期に色々な経験をしてきて、入学してくる。その経験を踏まえた声かけや授業作りを意識しなければならないと学べた。
- ・ 研修を通して、幼保からの引継の重要性を再確認できた。
- ・ 就学に円滑に移行できるような授業の工夫が必要だと感じることができた。

【課題】

- ・ 連携にあたっては公立園所がない校区や 5 歳児在籍園がない校区があり、校区により実情が違ふこと。
- ・ 架け橋期における取組に対して、施設や職員ごとに理解度の差があること。

5－2．教材等の作成

<作成した教材等の概要>

なし

<教材等の成果と課題>

なし

5-3. その他の支援

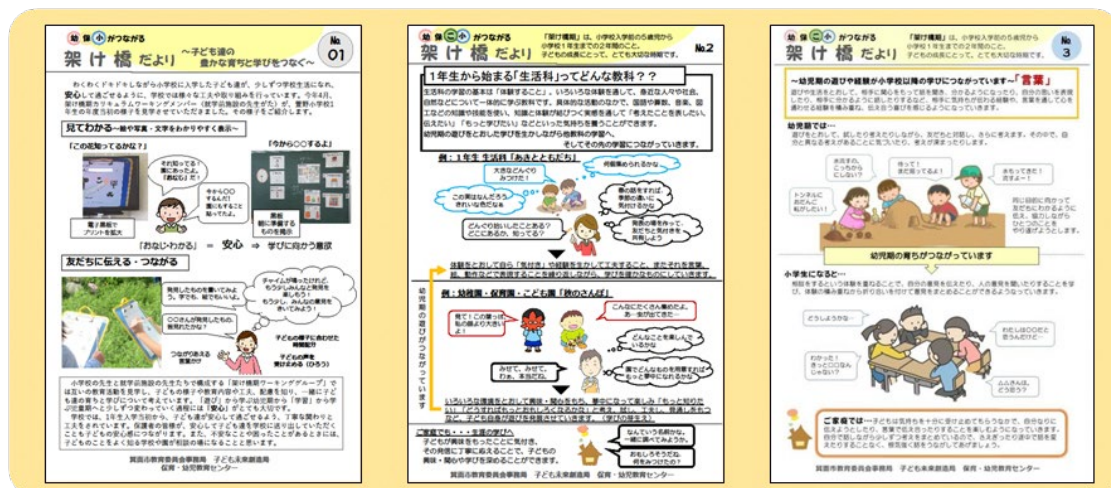
<その他の支援の概要>

【概要】

架け橋期カリキュラム開発検討会議において保護者から、「取組は他の保護者にも伝えておくべき」という意見があったことから、保護者向けおたよりをモデル地区に配布することにした。おたより作成にあたっては、保護者が知りたいと思う内容を聞き取り、保育・幼児教育施設や小学校で行われている工夫や、家庭でもできること等を紹介するものとした。また、5歳児の子どもをもつ保護者に就学に向けてのアンケートを実施した結果、様々な質問が挙がった。アンケート結果を踏まえて、各小学校の入学説明会で保護者の疑問に答える内容が多く含まれる「箕面市子育て応援ブック SMILE（入学準備号）」の活用について併せて案内した。

【成果】

- ・モデル地域において、保護者に「架け橋」というワードの認知が広まった。
- ・入学説明会資料を読むことで入学に向け気になることが一部解消された。
- ・架け橋プログラムの取組や幼児教育、学校教育の一端について知らせることができた。



6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

【成果】

- ・ 架け橋プログラムを先進的に取り組む自治体への視察を通じて、本市の学校教育を所管する部署の指導主事とともに、幼小接続に係る取組の意義等を認識することができた。
- ・ 学校訪問等により、地域の実情を聞き取り、保育・幼児教育センターがコーディネートすることで、実情に合わせた学校と保育・幼児教育施設の連携が進んだ。
- ・ 架け橋の取組については、これまで広く知られていなかったが、令和5年度施政方針において架け橋期カリキュラム等について言及したこと、また、民間保育・幼児教育施設連絡会において進捗状況を都度報告したことなどによって、行政内、市民、保育・幼児教育施設等において「架け橋」というワードや幼小接続の取組の必要性についての認知が広まったと思われる。

<定量的・定性的な調査結果>

なし

6-2. 園校における成果

<先生方の指導と子供の姿の変容>

【指導の変化】

【就学前保育・教育施設】

- 施設間の意見交流等で、幼児期の遊びは学習につながっているということを具体的に教えてもらったことで今行っている保育や教育活動の根拠と自信につながった。
- 子どもたちが自分で意見を言えるような声かけを心がけている。「何がしたい?」「どうする?」等、子どもたちの主体性を意識した言葉がけをするようになった。
- 子どもたちが意見を言うためには、心の安定が必要であることを認識し、安心づくりを心がけるようになった。

【小学校】

- 「やったことがないからできない」と思っていた。「やったことあるからできない(入学前があり、就学前にやっていたやりかたと違うからできない(しない))」ことがあるのだとわかり、1年生はゼロからのスタートではないことを意識するようになった。
- 以前は、「知らないから教えてあげないと…」という意識で「こうするんだよ。」と声かけしていた「知ってる?」「やったことある?」「どうやってやるのがいいと思う?」等、子どもの経験を尋ね子どもたちに問いかける機会が増えた。
- 子どもたちができないと思っていたことが実際にはできる等、見通しができたことで教材開発やカリキュラムを模索する幅が広がり、授業の工夫・改善につながった。

【子どもの姿の変容】

- 子どもたちが、今いる場所で「安心」して遊べる(学べる)ようになった。
- 子どもに経験や知っていることを尋ね、認める中で信頼関係が築け、子どもが安心して行動する姿につながっている。
- 子どもたちがどこまでできるのかを見通せるようになり、子どもたちへの取り組みせ方が変わったことで、子どもたちの学びに変化が出ている。。

<保護者の反応>

【事業実施前の状況】

- ・小学校の現状等について知らない保育者は、入学が迫る保護者からの質問に適切な回答ができなかった。
- ・5歳児の保護者から「授業についていけるかな」「給食食べれるかな」「友だち作れるかな」等入学後に不安を抱く声があがった。

【成果】（保護者からの声）

- ・保護者から「小学校に対して不安を抱いていたが、学校見学や開発検討会議への参加等を通じて、小学校のリアルな現場や授業等の工夫を知ることで、子どもに何かあった際には、『小学校の先生に聞いてみよう』と考えたり、子どもの疑問等には、『たぶんこうだよ』と伝えることができるようになった」との意見があった。
- ・開発検討会議に参加するモデル地域の校長から話を聞き、小学校の授業や行事にはそれぞれ目的やねらいがあることを知ることができた。また、学級通信やおたより等に記載されているねらいや目的に目が向くようになり、家での声かけ等にも生かすことができたとの意見があった。

7. 今後の課題と展望

【課題】

- ・ 今後小学校に担当者を置く等連携の窓口を設置し、保育・幼児教育施設と小学校が自走できるような環境を整備するとともに、保育・幼児教育センターが各施設をコーディネートする仕組みを検討する必要があること。
- ・ 施設の運営種別や個人によって架け橋プログラムの意義について理解度に差があるため、さらに理解を深める取組が必要であること。
- ・ 施設種別によって、ピークタイムが異なるため、連携後に幼保小の職員が集まり、子どもについて話す時間をとることが難しいこと。
- ・ 架け橋期の取組を全市域の保護者へ周知する方法や内容について、検討が必要なこと。
- ・ 全市域へ展開するにあたり、学校教育部署との強固な連携が必要なこと。
- ・ 民間の割合が増加していることから、引き続き民間園を含めた連携方法等の検討が必要なこと。

【今後の展望（予定）】

- ・ 「架け橋期」における取組の意義について研修会を通して、啓発していく（年1回以上）。そのうち、幼保小が互いの教育について、語り合う場として合同研修会を開催する（年1回以上）。
- ・ 小学校と保育・幼児教育施設だけでなく、教育委員会内の学校担当部署と就学前担当部署がともに事業を進めるため、強固な連携を図る。
- ・ 今後も「保護者向けおたより」を継続して配布し、各教育現場の工夫を参考に家庭でもできることなどの周知に努める。
- ・ 校区ごとに、職員同士が語り合う場を設ける。

8. まとめ

【幼保小の接続で必要なこと】

- ・ 幼児教育と小学校教育における「共通の視点」の設定
- ・ 子どもの「主体的な学び」の基盤となる安心して過ごすことができる環境づくり
- ・ 架け橋プログラムの意義について理解し、保育者や教職員が自分事として落とし込めること
- ・ 交流後などに幼保小が子どもについて語り合う場が必要
- ・ 保育・幼児教育施設と小学校が互いの教育活動等の特徴や違い、工夫を知ること
- ・ 大人同士（保育者・教職員）がつながること
- ・ 幼保小に連携窓口を設置すること

【自治体の役割】

- ・ 幼児教育担当部署と学校教育担当部署が「架け橋期」の取組における意義の必要性を感じた上で、双方が強固な連携を図ること
- ・ 教育委員会が保育・幼児教育施設と小学校の連携をコーディネートできるような体制を構築すること

【国の役割】

- ・ 幼保小の架け橋プログラムを促進するにあたって、研修の開催等土台となる幼児教育の質向上に活用できるような補助金を確保すること
- ・ 文部科学省内の幼児教育部署と学校教育部署にも架け橋をかけ、まずは国が幼保小の架け橋プログラムを一体的に進めること